

# 心の扉を

## 開いたら

患者会・福祉団体便り

障がいの有無にかかわらず、乳幼児期から学齢期にかけては、家族間のコミュニケーションが重要です。障がい児がいる家庭でも、障がい児を含む全ての子どもたちの状態を親が理解できていなければ、家族の関係がゆがみ、子どもの育成に必要なものを与えることができなくなります。親の言動が他のきょうだいの性格や行動に影響を与えていると思われる五つの主な傾向を書いてみました。

①「障がいのあるきょうだいの分まで頑張ろう」と考える優等生タイプは、実際の自分より背伸びをしているために自分の感情に追い込まれて、燃え尽きやすい傾向があります②自分の感情を抑え「世話を焼く」ことで自己存在を確認している「思いやりのある子は、自分自身のやりたい部分が不足しがちとなり、心の中に空虚感ができます③「家族の緊張を和らげよう」と努力し、ユーモアなどで明るい雰囲気をもたらせてくれる子は、いつの間にか自分の感情を把握するのが苦手となり、感情表現に疎くなります④家庭でも目立たないように

## きょうだいで差付けないで

我慢し、「耐えた行動ができる」「素直でおとなしい子は、いつの間にか自己主張が苦手となります⑤存在を家族に認めてもらいたいために不登校などの「問題行動」を起こす子は、自分自身をも追い込み傷ついてしまいます。

子どもによっては、これらのタイプを複数持っている場合もあるし、成長でタイプが入れ替わる場合もあります。このような状態は家族が障がいのある子のニーズだけを見て、他の家族のニーズに目が向けられずに生じるものと考えられます。どのタイプにする家庭に居場所を感じられないという状況は、きょうだいにとって「生きにくい」状態を生み出します。

障がい児きょうだいの居場所を確保するために家庭に必要なことを考えてみました。①家族間に、温かい雰囲気がある②障がいに関係することもオープンにし、自由に話せる雰囲気をつくる③障がいのある子に時間をとられても、他の子にも必要な時にスキンシップを持つ④障がいのある子の分を、他の子に過剰な期待をかけない⑤きょうだいに對して、年齢に不相応な責任を負わせない⑥子の甘やかしや厳しさに對して、きょうだい間で差をつけない⑦です。皆さんには、思い当たることがおありでしょうか？